

Title	金融資本の論理と歴史：一研究者の愚直な歩み：最終記念講演
Sub Title	The study of finance capital and my life
Author	赤川, 元章(Akagawa, Motoaki)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2007
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.49, No.6 (2007. 1) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	赤川元章教授退任記念号#2006年3月1日, 慶應義塾大学三田北新館ホールにおいて講演
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20070100-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20070100-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最 終 記 念 講 演

# 金融資本の論理と歴史

——研究者の愚直な歩み——

赤 川 元 章

## 1 はじめに

本日、選任教員としては文字通りの最終講義となります。どんな話を行おうか、色々と考えましたが、結局、社会科学に携わってきたものとして、一体、自分は何をしてきたのか、少なくとも、大学生時代の4年間、修士課程の3年間、博士課程の3年間、合計10年間の学生生活、それから専任教員として36年間、合計46年間を社会学者としてどのように過ごしてきたのか、つきつめれば、自分自身を研究者としてどのように総括しうるか、あるいは、もう少し一般化すれば、歴史の流れの中では何処に立っていたのか、また、現在は何処に行こうとしているのか、定年退職を機会にあらためて確認してみようと思いました。そのため、これまで、折に触れて書いてきた、そして手元にある自分の論文をザーッと通読してみました。もちろん、自分の生活史の一部を構成していますし、その時、その時で精一杯対応してきましたから、また記憶は蘇ってきますから、大体、内容は何であったのかは、ほとんど了解している積りでした。

ただ、いざ、過去の自分と対面してみますと、研究対象の変化は当然のことですが、自分の研究方法、研究軸さえもが、自分が想定していたものより随分と変化し、かつズレていると認識せざるをえません。こんな私でさえ、46年間の歳月と共に、時代の動向の大きな変化に影響を受けていたことを、あらためて実感せざるをえませんでした。

社会科学に携わるものは、総じて、本人を取り巻く環境や時代の影響を受けます。しかも加齢と共に変化していく本人の生活史と時代の動向との緊密な関係、これが研究対象の変化に対応しながら、同時に、研究のフレームワークだけでなく、これを根本的に規定する価値観、つまり世界観の変化さえ促していく、この一般論は、まさしく私にもあてはまる客観的事実でありました。

## 2 学生時代と卒業論文

最初の最も系統的な論文は、私の場合も、いうまでもなく、大学4年時の卒業論文であります。6月に大学院へ進路を決めていましたから、就職活動の必要もなく、また丁度、東京オリンピックの年にあたっていたため、東京の喧騒を避けて、アルバイトで貯めた資金をはたいて、夏から秋にかけて、長野県小諸に近い小さな村の民宿で過ごしました。アルバイト学生には、チョットした贅沢ではありましたが、この期間を利用して、将来のこと、および卒業論文の本格的な構想を練ろうと思っていました。専門分野は経営学のゼミナールに属していましたが、この分野にこだわらず、自分の書きたいテーマを取り上げようと思いました。いわば、学生時代の最後の年に自分が一知半解のままに振り回されてきた思想的傾向を整理すること、自分の中に鬱屈して漫然としていた疑問に対峙して、そこから脱却したい、もっと具体的にいえば、安保闘争以降の学生運動の挫折から大きな影響を受けた自分の思想的閉塞感を何とか克服したいという内的欲求からでした。とりわけ、科学とイデオロギーの混同、党派的なセクショナリズムとの決別についても一度、マルクス主義の原点に戻って、自分の現実的な生活様式の中から把握しうる「何か」をテーマにしたい、という問題意識があったからであります。卒業論文を手にとると、そんな青春時代のヴィヴィッドな感懐が蘇ってきます。

さて、卒業論文のテーマは「労働論」です。人間存在の本質を「働く」=〈労働〉に求めることが可能なのか、そして、歴史的存在としての人間の社会的関係はどのように構成され、また、その社会関係の中で「働く」=〈労働〉のもつ意味とは何か、を検討する、問題意識に結実しました。この命題を導きの糸として①社会経済の発展を自然史的過程とすること、②人間の自己産出をひとつの過程とし、ここに労働の本質を設定すること、③類=社会と個=個人の関係、④疎外された労働の構造、これらの4つの要因を基底において考察する方法を採用しました。書き上げた論文は、400字詰め原稿用紙で350枚弱、序論、第1編は労働の一般概念、第2編は労働の特殊概念、この第2編第1章第4節の所有論(2)で時間切れ、その次の第5節では主人と奴隷、第2章は分業論、そして、論文全体は6編から成立するプランでしたから、実際には、わずか最初の部分のみを仕上げたことになります。論文のもつ射程距離も計算できない未熟な問題意識倒れの試みでありました。それでも、第5編には近代経済学の労働概念、第6編にはスターリン主義の労働概念、という項目がありますから、当時の状況から判断すれば、研究対象として、社会主義体制の矛盾をマルクスの原思想それ自体に回帰して検討しようと意図したものであったことがわかります。

参考文献は、初期マルクスの『経済学と哲学の草稿』、『ドイツ・イデオロギー』、『資本論第1巻』、マルクスの思想形成に圧倒的な影響を与えたヘーゲルの『法の哲学』と『精神現象学』、レーニンの『哲学ノート』、それから梯明秀氏の何冊かの著作、出来上がった作品はこれら著作の引用から成り立つ、のり紙細工でした。振り返ってみれば、当時の学生運動の参加者の中にはぐくまれた一般的感性的思想的表現、マルクス回帰の思想運動の流れそのものの中にもありました

が、ただ、ヘーゲルまで遡ることで、やや徹底した点に特徴があったかなと思いました。この序論で終わった未完成な卒論は、『労働論ノート』という表題をつけて、提出しました。

### 3 修士課程の時代と修士論文

大学院では、とくに修士1年目は、会計学の講義を中心に聴講しました。将来、税理士か、あわよくば、会計士になれば、と思っていたからです。職業と思想との完全な分離、これもアルバイト学生の生活の知恵でした。頭の中では、もちろん『労働論ノート』はくすぶってはいましたが、思想とは関係のない技術的な作業も却って新鮮な気持ちで学んでいました。具体的な事例研究や制度的な事務処理や企業評価の問題に触れると同時に、それだけでは飽き足らず、田中耕太郎、黒澤清、山下勝二、宮上一男、シュマーレンバッハ、ペイトン、リトルトンらの会計学に触れつつ、簿記の練習もしました。当時、この勉強が、後の研究で実証分析に役立つとは思っていませんでした。大学院の授業や会計学の勉強を通して、あらためて経済学の根本的な修得の必要性を痛感しました。そのため、修士2年目は、商業高校の非常勤講師（週12時間）をしながら、ほぼ大学院は休学状態で『資本論』の精読に明け暮れました。学部卒論の挫折は、自分にとって経済学の知識に限界のあったことをいたく認識していたし、企業会計にしても、根本的に追究していくには、個別資本運動の会計的側面からだけでなく、同一産業部門、さらには総資本運動との関係を含めて把握することがすこぶる重要と思ったからです。ドイツ語の原書と翻訳とを比較しながら、少しずつ進めていったのですが、とくに感銘を受けたのは、最初のヘーゲル弁証法がむき出しで出てくる商品論の箇所ではなくて、イギリスのブルーックスを用いて、労働者の収奪の現状を描いた「資本制の蓄積の一般的法則」の第23章でした。辞書を引きながら読むと、単語の意味に想像が膨らむためでしょうか。

ドイツ語原書との対応は、流石に『資本論（第1巻）』で止めましたが、自分なりに『資本論』全3巻を理解した後、ローゼンベルクの『資本論注解』などの解説書にあたり、何が問題点で、何が重要であるか、自分の理解度がどのくらいの水準か、を確認しました。

というのも、当時我々の仲間の中で、経済学に特に興味をもっていたものは、ほぼ宇野派理論の影響下にありました。原理論—段階論—現状分析論の、見かけはヘーゲル弁証法的の体系に似ている宇野経済学だけれども、主体的唯物論に接近していた私は、何となく違和感を抱き、距離を置いていました。そして、大学院3年目、小竹豊治先生が、大学院の演習でヒルファーディングの『金融資本論』を購読していることを知り、履修の許可をお願いしました。独学で学習することの独善性を避けるために、アカデミックな世界で体系的に「マルクス経済学」の原典を学ぶことに意義があると思ったからです。当時、商学部の経済学に関する講義は、すべて近代経済学でしたから、この時はじめて本格的な生身の「マルクス経済学」に関する授業を受けたことになります。もちろん、ヒルファーディングの『金融資本論』に関する知識、そして評価は知らないわけではありませんでした。本格的に原典としてそれ自体に接するのは初めてでした。精読すると、用語や概念について自分の理解してきたマルクスのそれから大きく隔たっている点も多いの

には驚きました。古典派経済学やマルクスの引用の仕方、それと同時に近代経済学の批判、そのうえで、ヨーロッパ高度資本主義の当時の現状を分析した文献と資料の渉猟、あらためて理論水準の高さ、さらに何よりも著書全体の放つ知性的な香りに魅了されました。とはいえ、小竹先生の説明を拝聴しても、またヒルファーディングの解説本や批判論文を読んでも、なかなかストーンと納得出来ず、字句的解釈の主観性や超越的批判ではないか、ヒルファーディングの方法はモット深いところに根っこがあるのではないか、そんなふうに思えました。しかし、思想的には、マルクス主義一辺倒で拘束されていましたから、この辺が認識限界で、それ以上深く掘り下げることもしなかったし、また出来ませんでした。

修士論文は、とにかく大学院に籍を置いた者の課題として専門領域について取り組もう思いました。幸運にも、指導教授の中西寅雄先生は、若き東大教授時代に『資本論』に依拠した「個別資本説」としての経営経済学を提唱しておられましたから、その枠組みを大きく踏み外さない限り、論文を読んで頂けるのではないかと期待しました。そこで、企業に関する金融理論、をいわば中西経営学の応用問題として、いわゆる「企業金融論」を展開してみようと考えました。この点では、小竹先生の演習で学んだヒルファーディングの影響が大きかったと思います。ところが、いざ、研究を進めていく段階になると、金融論研究の前に「貨幣とは何か」が立ちはだかつて参ります。とりわけ、世界市場を前提とした企業行動を対象とした場合、国際的に生産力格差のある商品価値、国民通貨の価値と国際通貨の価値、つまり為替相場論まで、原理的に検討しない限り、国際的に展開する大企業の行動および資本価値は把握出来ないのではないかとまたまた迷路に入り込んでしまいました。当時、我々の仲間内では、岩田弘氏の『世界資本主義論』が風靡しており、その方法に対して疑問を持っていたために、このような理論的設定に偏していったのだと思います。結局、ここでも、本来の意図とは別に「貨幣とは何か」、「信用とは何か」を問うことから始め、価値法則の観点、世界市場および国家との関連、信用と再生産の関係、宇野派理論批判、の4点を留意しつつ、検討していきました。そこで何とか出来上がった草稿は、貨幣論の部分が250枚、今、この部分を読み返してみると、ヒルファーディングの「純粋紙幣本位の理想郷」の批判に重点が置かれ、ローゼンベルク、カウツキー、ゲー・カズロフらの公認の批判者に組みしてアプローチしております。第2の部分は、外国貿易と国際価値論、これも同じく250枚、第3の部分は、商業信用と銀行信用に関する考察、そして、第4の部分は株式会社と擬制資本、この部分は、言うまでもなく、ヒルファーディングの大きな影響下にありますが、同時に、ヘーゲルの所有論を援用しつつ、企業統治論まで踏み込んでいます。この部分が論文全体では、最も大きなものとなりましたが、未完成の項目も多々あり、結果的には、不完全なサーベイ草稿の域を出ず、したがって、またしても、草稿全体がノートの水準を超えられませんでした。残念ながら、草稿を整理して特殊なテーマについて体系的な論文として取り掛かる前にタイムリミットとなり、結局、草稿全部を『貨幣・価値・信用理論に関する手稿』という表題をつけて修士論文として提出しました。論文の質を量で補ったような中途半端なものでありましたが、この未完成論文を認めて下さった中西先生、および当時の大学院研究科委員会の先生方はきわめて寛大でした。今でも感謝しています。ただ、当時のマルクス経済学分野の最先端の業績を検討しつ

つ、それを引用するにせよ、批判するにせよ、その地点に立つことが出来たという達成感があったのも事実です。この吸収の時代が、ある意味では、勉強をされていて一番楽しい時期でした。論文において完成された部分は既存の枠組みに拘束された発想の中にもありましたが、残された未完成の部分が、その後の研究課題として大きくなるのしかかってくるとは、予想外のことでした。

#### 4 博士課程の時代と研究者への修業

修士論文もまた、すべてのテーマに中途半端であり、さらに残された問題を深めてみたい、もう少し勉強を続けたいという思いに駆られ、博士課程への進学を選択し、幸いにも、小竹先生の演習に加えて頂きました。博士課程の3年間は、研究者として出発する準備段階として、今、振り返りますと、きわめて充実した期間でした。当時の小竹先生の演習には、経済学部の飯田裕康さん（現在は名誉教授、2期、経済学部長を務められた）の他、他大学の先生、経済学部・商学部の大学院生なども参加し、いわば学部を超えた「合同演習」であり、いつも先生の研究室が一杯になるほど活気がありました。ここでは、ヒルファーディングの『金融資本論』の解釈の仕方を背景に、当時の学会で論争になっていた「創業者利得論」、引き続いて「信用制度と株式会社」論、これらに関する公表論文の検討を主題としていました。担当は勉強のために大学院生の役割であり、毎週とはいわないまでも、連続して報告する課題が与えられたような気がします。論旨を紹介し、論点を摘出し、その問題点を評価する。その後、全員で論議。この機会は大変勉強になりました。その延長線でしょうか、私の書いたものが、『三田商学研究』に初めて掲載されたのは、論文ではなくて書評であります。後藤泰二氏の『株式会社の経済理論』を取り上げました。

同書は、馬場克三教授の「個別資本説」の具体化を試みるために、ヒルファーディングを独自に解釈し、また宇野派理論を批判したことに特色がありました。その意味では、論評に値するには格好のテーマであり、当時所属していた企業経済研究会の東西合同大会で、著者本人を前にコメントすることにもなりました。それから、数年後、日本経済学会連合が、各学会の研究動向を紹介する目的で『経済学の動向』の3部作を編集したのですが、私に「証券理論」の項目執筆の依頼があり、以上のような大学院での研究蓄積は「擬制資本と株式会社」に関する論争史を整理するのに大変役立ちました。また、小竹先生は大学院の授業に法政大学の元総長、渡辺佐平先生を講師として招聘されました。最初の授業では、かなり長い時間をかけて、丁寧にマルクスの原典『経済学批判要綱』の輪読を行いました。その中で、スミスやリカードなどのイギリス古典派の巨匠だけでなく、フランスの空想的社会主義者、ブルードンなどにも触れ、いわば『資本論』成立史の背景をも検討しました。さらに、先生の下で、フラートンやソートン、ラドクリフ委員会報告などを読み、イギリス金融論の古典や金融史を通してアカデミックな勉強の仕方を学びました。渡辺先生の授業は定年による年齢制限で終了致しましたが、その時、共に授業に参加していた院生のいわば渡辺佐平ゼミナールの卒業論文として纏めたのが『マルクス金融論の周辺』（法政大学出版局）であり、ここで、「擬制資本の概念について」という論稿を書きました。貨幣・手形・銀行信用・土地・公債・株式などすべての具体的な信用手段の擬制性について『資本

論』の成立に至るまでの学説史として整理しました。ヒュームやロックだけではなく、シスモンディやモンテスキューなどの擬制資本に関する見解を取り扱い、「証券理論」の論争史を相対化して見直す機会を得ました。また、小竹先生自体の演習では、18世紀におけるイギリスの株式会社発生史に関する論文を読んでいました。難解なクラシカルな英文であるため、雑談が多いことも重なってしばしば、一日に5行のみというような時間もありました。ショーターの英英辞典を引きながらの翻訳、歴史研究のあり方を経験しました。

## 5 リーフマン研究について

しかし、私自身は、ヒルファーディングやレーニンが現状分析の資料として取り扱っていたリーフマンの『参与会社と融資会社』に何となく興味を抱いて取り組んでいました。ドイツ語の学習の面もありましたので、最初の部分から手を付けると、労働価値学説の極北にある限界効用学派の理論から始まっていました。ヒルファーディングやレーニンは、リーフマンを専ら発展した資本主義社会における企業形態の資料としてのみ対象としていましたから、このリーフマンの設定には極めて新鮮な刺激を受けました。学問的出発点において独占資本の生成と確立に対して徹底的な実証研究を試みてきたリーフマンが、何故、かくも著しく抽象的・主観的な限界原理を展開するオーストリア学派に立脚したのか、この研究スタンスの落差の大きさに関心を抱き、研究対象とは別に、知的好奇心からリーフマンについての著作や論評を集めていきました。とりわけ、その中でも、ブハーリンの『金利生活者の経済学』において「オーストリア学派の限界効用学説は、リーフマンによって深められ、その特質を鋭く強調され、それゆえに、同学派は、リーフマンをもって自己認識の頂点に達した」と指摘されたことから、検討の意義を強く触発されたのかもしれませんが。幸いにも、博士課程の3年目に助手として採用され、気持ちの余裕もでたのでしょうか、何かに引きずられるかのようにリーフマン研究にのめり込んでいきました。助手の時代の4年間と助教授に昇進した年を含めて、ほぼ5年間、研究者として最も重要な時期に、リーフマン研究で明け暮れし、このテーマに関して4本の論文を『三田商学研究』に発表しました。

まず、3本は、貨幣に関する論文を書きました。リーフマンの見解は、第1次大戦後のドイツ・ハイパーインフレーションの総括から、紙幣本位の通貨体制を理論的に解明すること、同時にインフレから起こった社会的矛盾へ政策を提起すること、というきわめてリアルな課題に対応したものでした。名目主義の系譜に立ち、バークリー司教の「観念的度量単位説」に接近した貨幣論であり、貨幣の機能を「抽象的計算単位」と「一般的交換手段」の二元論で設定し、これにオーストリア学派の主観的な限界価値論で、貨幣価値を説明するというものでした。その意味では、金属主義の系譜にあり、客観的な労働価値論に立つマルクスの方法とは正反対の関係に位置づけられます。そのため、何故、このような論理に現実的説明力があるのかを明確に把握することが不可欠であり、リーフマンの論理を支える主要な構成要素、方法論としての新カント派のリッケルト、とくにマールブルク学派のコーエン、経済学論理として、ゴッセン、ベンサム、メン

ガー、ベーム・バヴェルク、貨幣論として、クナップ、ヘルフェリッヒ、ヴィーザーなどを検討しました。しかし、これらの著作は、いずれも読み通すのにナカナカ骨が折れ、さらにリーフマンの論理との関連で読み込んでいくのは相当な時間と大きな知的腕力を必要としました。批判とは根底的に理解することであり、その本質と限界とを認識することだというスタンスに立っていましたから、この姿勢に対応して、批判の基準として唯物史観の観点もさらに深めることを要求されました。ブルジョア・イデオロギー批判として展開されたマルクス主義の文献も他方では涉猟し、逆に、その超越的批判の無内容さにガッカリしたのを覚えています。ただ、貨幣論の論稿を書き上げた時、これまでのリーフマン理解の仕方は一面的であり、いわばマルクスのカテゴリーに引き寄せられて偏向しており、間違っていたのではないか、という思いを強くしました。そこで、今度は、リーフマンについて、一部の、局所有効性だけの論点ではなく、これまで避けてきた経済学体系全体と関連づけて対象化してみたい、という要求に駆られ、もう一度、論理の再構成を試みました。リーフマンの分厚い著作『国民経済学原理』のI・II（いずれも800頁を越える大著ですが、極めて優れた要約がついており、実際には全部読まずに済んだ）に取り組んでやり直したのは、まだ若かったからだと思います。限界収益均等の法則や価格論を踏まえて、貨幣と価格の論理を検討しました。こうして分かったことは、リーフマンの「経済理論」は、「経済生活に出来るだけ完全な平均状態を実現すること」を理想とする組織された資本主義論であったということです。「経済的予見と思慮深い干渉」および「整然とした安定的な貨幣制度」を不可欠の前提とし、産業資本と銀行資本の合理的な経済行動を支持し、階級対立の調和を図り、そのうえで、経済秩序の均衡状態を組織しようとする理念的な資本主義論でした。その限りでは、まだ、依然として、国家から経済の相対的自律、競争の役割の評価、というブルジョア自由主義の伝統の中に立脚し、しかも独占資本主義とも協調する「確固とした原則と具体的目標」とを設定した点に特徴があったといえます。

そして、これは、少々、あと知恵となりますが、今日のように電子マネーや決済システムが発達し、貨幣の観念化・抽象化が一段と進行してくるとすれば、あらためて、リーフマンのいう「抽象的計算単位」説の貨幣論が今日の問題意識の下で再検討の対象になりうるのではないかと最近考えています。

このリーフマンの生きた時代は、同時にヒルファーディングの生きた時代でもあり、同一の現実を対象化しているはずであります。いままで、マルクス・サイドに偏し、とくにロシア・マルクス主義者の発想からヒルファーディングを理解していた方法に疑問を抱くようになり、ヒルファーディングの再検討を試みることにしました。リーフマン研究を通じて、絶えず念頭から離れなかったのは、ヒルファーディング批判を行った公式的見解の閉鎖性・一面性でした。このことは、これまで夢中で読み込んできたヒルファーディングに、今度はもう少し、客観的・実証的に、しかも根本的に立ち入ることが可能だと思ったからであります。



## 6 ヒルファーディング研究について

そこで、まず、ヒルファーディングを彼が生きた時代の中に位置づけ、出来る限り、彼固有の思想形成史の内的必然性を追究する方法を採用しました。1890年代中期、ドイツ・オーストリアの社会主義運動は、労働運動では改良主義、思想領域ではマルクス・エンゲルス批判が公然と行われ、「マルクス主義の危機」が叫ばれている時代でした。とくに、新カント派からの批判は深刻であり、この傾向にどのように対抗するか、が当時のマルクス主義者の課題でした。ただ、かかる新カント派の問題提起を真正面から受け止め、これを「マルクス主義の回春の泉」というように積極的に理解し、マルクス主義の「正当化を試みる」理論的努力を行ったのが、マックス・アドラーを中心としたオーストロ・マルクス主義者グループでした。とはいえ、アドラーの方法は、ドイツ主観的観念論の諸成果を摂取し、これによって時代に照応するマルクス主義を再構成しようとするものでありましたから、結果的には、「正当化」という意図とは別に、新カント派修正マルクス主義者と接近したのは必然でした。ヒルファーディングの方法論は、このアドラーの系譜にあるだけではなく、またマッハの「思惟経済説」にも関心を示していました。こういう観点から、『金融資本論』にアプローチした時、ヒルファーディングの意図した理論を始めて根底的に解明し得るのではないか、という設定に思い至りました。

さしあたり、アドラーの方法から説明すると、彼は、唯物史観の根本概念として「社会化された人間」の概念を設定し、この概念はカントの「意識一般の超越的概念」に類似しているから、その意味では、マルクスの業績もカントと同様な「認識批判」という「理論的」部面に位置づけることが可能だと主張しました。このフレームワークを前提として、「社会化された人間」の概念から「経済的価値」の概念を導出すれば、結果的には、カントによってマルクスを解釈することになります。そして「意識一般」の解釈にあたって、「個人的意識と意識一般の内的関係」と捉え、この「相異なる思惟行為」を「精神的交換」、つまり、カントの「社交性」の概念に還元して理解したことから、マルクスの「社会化された人間」の概念、すなわち「社会的諸関係」は、「交換」概念として把握されることになりました。したがって、ここでは「経済的価値」の概念は、「交換価値」となります。このアドラーの見解を踏襲してヒルファーディングは、『ノイエ・ツァイト』誌で「カール・マルクスにおける理論経済学の問題提起について」の論文では「交換関係」を媒介にして「社会関係」が成立したと提起し、そして、『金融資本論』においても「理論経済学の任務は……交換の法則を見出すことである」と論じたのは当然の論理的帰結であったと思います。この方法論上の問題提起は、経済学における社会関係は、生産関係よりも流通関係が優先する、モット言えば、市場経済の研究が第一義的課題である、ということにあります。

次に、もう一つのヒルファーディングの方法で重要な問題意識は、エルンスト・マッハへの接近であります。この考え方の背景には、ヒルファーディング自体が「科学とは、現実の概念的把握にはかならない」、これを経済学に適用すれば、「歴史的記述から理論的把握にすすんでゆく」と認識し、そのうえで、「科学的進歩に決定的なものは、新しい事実である」と確信していたこ

とにあります。したがって、ヒルファーディングは、発展する「新しい事実」を如何に概念的に把握し、法則化すべきかの方法で、マッハの「思惟経済説」を「唯物史観に類似した結論に達している」と高く評価しました。かくして、ヒルファーディングは、「経済的發展から生じてきた新たな事実」は、思惟の適合化を要求し、この「思惟の事実への適合化は進歩そのものである」とし、さらに「思惟相互の適合」という「科学的思惟」の「論理的作業」を、意識的に「金融資本論」の中にも導入していきます。その最も典型的な例は、ヒルファーディングの直面した「新しい事実」つまり「オーストリアの紙幣本位」の現実でした。かれは、古いマルクスの経験と思考を突破し、「労働価値」論の新たな展開として、「思惟相互の適合」という「科学的思惟」の「論理的作業」の結果から「社会的に必要な流通価値」論を積極的に提起しました。この貨幣論は、マルクスの正統的解釈派、ロシア・マルクス主義者などから『資本論』を逸脱するものと厳しい批判を受けることになり、私の修士論文は、まさにその影響下にありました。「新しい事実」は明白であるが、この論理のベースとなる思惟は何か、ヒルファーディングといえども、何かをヒントにしているはずだというのが、私の問題意識でした。というのも、学生時代、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を読んでいた時、神を貨幣と置き換えれば、それが初期マルクスの『経済学と哲学の草稿』にそっくりな文章となっていたのを知っていたからです。思想の進歩とは、このように始まるのか、と感心したものでした。

ところが、ここでのヒルファーディングは、ヘルフェリッヒ、クナップ、フラートンなどを論じつつ、金属貨幣から独立した紙幣の機能の論拠を摘出します。ここまでは、提起された「思惟」は明白です。そのあとの「流通価値」の設定の根拠が分からない。この点にリーフマン研究の成果が生きてきました。ヒルファーディングの論理は、ヴィーザーの貨幣論の枠組みにあると確信していましたし、「紙片を貨幣となすものは反射した労働価値である。月を輝かすものが、反射した太陽の光であるように、紙の場合には、価値の光（価値標章）は、すなわち商品価値の光（商品価値標章）である」という有名な文章は、ベーム・バヴェルクの『経済的財価値の基礎理論』の費用財の叙述とそっくりであることも見出しました。しかも、ベーム・バヴェルクは、「費用となる生産財が費用財」であり、しかも「貨幣を生産財とする」と規定しています。まさしく、ヒルファーディングの論理は、費用財を紙幣と置き換えさえすれば、商品と貨幣の関係は「労働価値」と「限界効用」の相違があるにせよ、オーストリア学派と完全に適合していました。しかし、徹底的なオーストリア学派の批判者ヒルファーディングは、もちろん、この部分の下敷きを全く明示していません。

同様な論点は、かれの独創となる「創業者利得」論についてもいえます。この「一つの独自の経済的範疇」は、ドイツ銀行資本の新たな資本蓄積様式であり、用語について出所は不明ですが、少なくとも、シュタイニーッツァーの『株式会社の経済理論』で設定された「融資利得」の概念をより厳密化した内容となっています。銀行資本は利子生み資本を産業株式会社に投下して平均利潤を得る機会を作り出すことも可能であるとすれば、同一の貸付可能な貨幣資本から、投下の仕方によっては、平均利潤と平均利子の二つの利得を生み出すことが可能となります。そして、平均利子を犠牲にして平均利潤を目的とした場合、当然、その差額としての余剰、企業

者利得が可能性として導出されることになるのは当然です（この考え方は機会原価の発想と同一であります）。このように企業者利得を子生子資本運動の評価概念として設定する方法は、これまたベーム・バヴェルクの展開した同一の生産手段から3種類の限界効用の異なる財を生産する費用法則の論理ときわめて類似しているようにみえます。そして、このように規定された企業者利得は、評価利潤であり、これを現在価値に引きなおし、証券市場で実現しうるのが創業者利得であります。この創業者利得に関する論文は、昨年の『三田商学研究』（第48巻1号）に「株式会社資本の3局面について」という題で掲載しました。長い空白の時間の中で眠っていた原稿に少し手を加え、色付けしただけですから、厳密な論証に耐えるかどうか自信はありませんが、ヒルファーディングの「思惟の適合化」の論理は、以上のように解説できるのではないかと、ここまで、ヒルファーディングを検討してきた時、丁度、留学の機会が与えられました。

## 7 留学時代と新しい研究テーマ「学位論文」

留学は、定年間際の遊学と思っていたため、外国語の会話も留学先も全く考えてもいませんでした。とにかく、家族を連れて行くためには、自動車の運転免許が必要だ、といわれ、まず、教習所通いを第1優先にしました。先ほど述べた飯田さんに相談したら、フランクフルトに銀行史研究所がある、そこはどうか、といわれ、紹介して頂きました。どうせ大学に籍を置いても言葉が分からなければ意味がないと思っていたので、表向き、これまでドイツの銀行理論を中心に研究してきたが、今度は実証的に、とくに日本と異なるドイツのユニバーサル・バンキングシステムを研究するという名目で、研究計画書を提出致しました。同研究所はドイツ銀行の傘下にあり、銀行史に関する蔵書の管理、資料の発掘、機関紙や蔵書の出版などを行っており、所長が1人、秘書が1人、アルバイトの学生が2人という小さな事務所のような研究所でした。ただ、上部組織はシッカリしているようで、そこに後年フランクフルト大学の教授となるドイツ銀行史の権威、若きポール博士がいました。この時の縁が、今日の私のドイツ金融史研究の大きな基盤となりました。留学当初の半年、市営の成人学校の語学コースで日常会話を習得する初級クラスに通いました。授業料が安いからか、外国人労働者やその子弟、さらに開発途上国の留学生が多く、学生に戻って、初めて会話を学んだ体験は極めて新鮮でした。そして、最初は単なる好奇心から、これらの青年の出身国とドイツとの関係をチョット調べるつもりで、留学先の図書室で書物を拾い読みしているうちに、ドイツ大銀行の子会社、「海外銀行」に行き着きました。トルコを筆頭とする中近東諸国、それからラテン・アメリカ諸国におけるドイツの海外活動の帰結が、なお今日のドイツ海外経済圏を規定しているのではないかと、その牽引車がドイツ大銀行とその子会社の海外銀行だとすれば、これこそわが国のドイツ金融史研究の空白を埋める課題ではないかと、思いました。こうした素朴な問題意識から出発したのが、ドイツ国際銀行業研究の始まりでした。そして、この一寸した弾みからの研究が私にヨーロッパ研究者への道を選択させる契機になるとは、この時、まったく意識していませんでした。しかし、研究対象に一旦踏み込むとなると、ドンドン深みにはまり込んでいき、当初の想定をはるかに越え、対象領域は深く、また果てしなく広が

りました。帰国後も留学中に収集した資料を元に研究を継続しましたが、分析視点とフレームワークの確定、銀行業の制度的・実務的知識の習得、新たな資料の必要性などにより、遅滞として研究は捗りませんでした。研究を開始して、14年。途中のサバティカル休暇を用いて資料を求めてのドイツ長期滞在。不本意ながら仕上げたのが、博士學位論文『ドイツ金融資本と世界市場』であります。

論文のフレームワークは、まず、マルクスの『経済学批判要綱』のスケッチを下敷きに、G. タッケの世界市場モデルと F. シュミットのドイツ国際支払取引の構造図を従属学派の「中枢・周辺」の世界システム論に組み込んで世界市場論を構築しました。そのうえで、ヘーゲルの一般性—特殊性—個別性の論理を金融資本の存在様式の規定に適用しました。そして、この金融資本の行動論理を規定する「営業および経営指導」の方向性には地政学的アプローチを採用し、資本運動の世界性をドイツ経済圏と結びつけ、「地理的生活区域」として展開しました。しかし、問題は、特殊性を規定する国家の経済システムであります。この点については、ドイツ歴史学派の実証主義的方法、すなわちヘーゲルのいう国民精神の具象化、資料収集には限度があるにせよ、事実資料重視の観点を徹底させました。ただ、ドイツ金融資本の特殊性については、「銀行によって支配され、産業資本家によって充用される資本である」というヒルファーディングの金融資本規定は、このように設定された国際銀行業の領域においては、とくに適応いたしました。

論文の内容は、1914年以前のドイツ資本主義の対外発展のプロセスについて、ドイツ大銀行の起業家的性格に注目しながら、ハンブルクからラテン・アメリカ諸国へのルートとベルリンからバルカン・オリエントへのルートを構造的に解明したものであります。この論文は、ドイツ語を世界認識の媒体として用いたことから、各種の資料および文献についてドイツ以外の地域に関してもドイツ語で記述したものを主体として分析しました。その意味では、当該分野におけるドイツの研究水準を反映させることは出来ました。ところが、それゆえに、研究対象の全体性にアプローチするという観点では、必ずしも十分とはいえない結果となりました。このことは、外国語という障壁のみならず、歴史研究にとって最も重要な側面、一次資料の収集と利用に限界のあったこととも重なっています。さらに、ドイツ資本主義の対外発展の対象地域としては、きわめて限定された場所のみを分析対象として取り上げ、ここには、ヨーロッパ、北アメリカ、アジア、アフリカの研究は言及されていません。學位論文として公刊されたものの、残された課題をどのように展開するか、反省を踏まえてどのように対処するのか、これが、次の研究テーマとなりました。

留学中、表向きの計画書通り、当初は、銀行史研究所の資料に当たりながら、ドイツ銀行業の創業者利得による資本蓄積の実証分析を試みました。ドイツ銀行からも創業以降の『営業報告書』も頂きました。しかし、全体的なシステムどころか、個別的な事例研究としても、これを実証的に明らかにするのは、大変困難だということが直ぐに分かりました。研究の行き詰まりを何とかしなければと焦りつつ、活路を求めて一応、語学コースを修了した後、ドイツ語能力は別にして、ドイツの大学生活を経験してみようと思い、所長の紹介で、フランクフルト大学の金融論ゼミナールの2つに参加しました。銀行論のゼミナールでは、履修学生は200名余、大教室で教

授はいつも15分遅れのアカデミカー・ツァイト、学生の共同発表の後、10分ほどのコメント、内容は、ユニバーサル・バンキングシステムか、銀行業と証券業の分離システムか、というテーマでした。もう一つは、客員教授の証券論ゼミナールで、日本でいう罫線分析のようなことをしていました。レベルは平均的でしたが、文字通り、体験のみで十分な内容でした。

結局、ここでは、何ら、新しい研究テーマを見出すことは出来ませんでした。そこで、考えたのは、なお依然として影響力の残っていた、戦後のドイツ経済政策の主柱となった「社会的市場経済」学派の貨幣・信用論の検討でした。リーフマン、ヒルファーディングと続いてきましたから、これを付け加えることによって、独特の貨幣・信用学説史批判が可能だと思ったからです。

それから、もう一つ、大学構内および大学近隣の書店から見つけたテーマでしたが、ドイツにおいては60年代末から70年代半ばにかけて、労働者の側から社会化への経済システムの転換要求が台頭しました。とくに、大銀行の経済的権力の圧倒的優越性は、銀行業の支配的影響力を通して、産業界、さらには中央銀行・政界の動向までも左右する弊害が注目された時期がありました。銀行業の強大な経済権力を規制する目的で、西ドイツ基本法に基づく公有さえ主張され、74年には、SPDのミュンヘン大会では社会化に関する討論さえ行われました。この背景には、当時、フランス、イタリア、オーストリアなどの銀行は社会化されており、むしろ西ドイツが西欧では例外であったからであります。したがって、銀行国有化論に関する文献も多く刊行され、このテーマに関する資料も収集しました。だが、すでに触れたように、ドイツ国際銀行業研究に傾斜したため、これらの資料は、ほこりを被ったままになりました。ただ、当時の事情を思い起こし、一度だけ資料の一部を用いて書いたエッセイが「市場対国家——体制転換のキーワード、社会化問題によせて」『CSA ニュースレター（100号記念特集）』（2000年8月）であります。

## 8 目下の研究テーマ

ところで、『ドイツ金融資本と世界市場』を出版したあと、まず手を付けたのは、この本では触れることの出来なかった地域、アメリカ合衆国の研究でした。ここでは主として、ドイツ銀行の対米証券投資を取り扱ったのですが、この論文は、ザイデンツァールの記述した『ドイツ銀行100年史』と数名の研究者の記述した『ドイツ銀行125年史』を基本資料としながら、鉄道証券に特化された状況に限定して実証的に検討しました。ただ、ドイツと合衆国との金融関係は、「利害を超えた個人的関係」、すなわち「ニューヨーク金融界の発展に重要な地位を占めていたドイツ系ユダヤ人」との関係に大きく依存しているため、資料的制約によって内部に立ち入る分析はきわめて困難であることが分かりました。これには、ドイツ銀行頭取アプスの反ユダヤ的行為を批判したエーベルハルト・ツィーシヨンの著作『銀行家と権力』のように、ナチズムとユダヤ人に言及した場合は、裁判にかけられたという事情もありました。ドイツ金融史研究で、ユダヤ人問題を取り上げる場合、何処まで可能か、その限界が予測できず、そのため、リスクを避けて安全と思われる手元の資料の範囲内にとどめ、資本市場に関する公刊資料の解説に力点をおいて検討しました。

丁度その頃、法政大学名誉教授の西村閑也先生から「国際銀行史研究会」に誘われ、研究分担としてドイツ・アジア銀行を担当することになりました。これまでの研究スタイルから脱して、一次資料を前提としてドイツ海外銀行を追究することは果たして可能か、という歴史研究にとってオーソドックスな方法を試みることにしました。旧知のポール教授に問題意識と論文の構想を伝え、ドイツ銀行の所蔵する資料への便宜を図ってもらいました。また、同時代の背景を明らかにするために、当時の新聞・雑誌などはハンブルクの世界経済研究所 HWWA のシャアラ教授のお世話にもなりました。時間が随分とかかりましたが、ようやく、取り組んだ研究成果の一端が「中国鉄道投資とドイツ・アジア銀行」という表題で『三田商学研究』（第48巻5号、2005年12月）に発表できるまでになりました。さらに、目下、検討している課題は、ドイツのグローバル化の一環として東アジア市場もドイツ経済圏に編成し、そこで、ドイツ海外銀行の貿易金融業務がこのシステムを保持するインフラの支柱として不可欠の役割を果たすという、国際銀行業の位置づけの論点であります。この論点を実証するためには、ドイツ・アジア銀行の総合貸借対照表に基づく本支店間の取引状況を勘定別に分析する作業が決定的となります。しかも銀本位制を採用し、金本位制下のロンドン金融市場とリンクしているとすれば、為替相場の問題も入り込んできます。

幸いにも、ドイツ銀行の歴史公文書館から、1906年度の手書きの「総合貸借対照表」を入手しました。解読がナカナカ厄介ですが、今になって、修士課程時代の会計学の勉強と修士論文で未完成に終わった為替相場論に、こんどは具体的分析の問題として対応することになりました。『ドイツ金融資本と世界市場』における枠組み、つまり資本投資を優先してきた分析スタイルから、今回は貿易金融システムを優先する分析方法に問題意識を移行させた点に特徴があります。この課題を通して、明確になったことは、事実資料を積み重ねれば重ねるほど、レーニン『帝国主義論』の呪縛から解放され、ヒルファーディング『金融資本論』の枠組みこそが、あらためて、ドイツ銀行資本の場合には、当時の「新しい事実」に適合していたという認識を得たことであります。

さて、ベルリンの壁崩壊を契機とする東欧社会主義体制の崩壊は、経験的にも理論的にも、よく考えればその可能性は否定できないと理解しても、現実として、しかも大衆革命として実現されたのはショックでした。我々にとっては何ら理想の世界ではない市場経済に幻想を有する東欧の人々、バナナに憧れる社会体制の貧困さ、価値観のプロバガンダと強権的な拘束力では、すでに国民の心を捉えきれなくなった社会体制、20数年前の社会化＝国有化の流れが大きく変化したヨーロッパ、オーストリア・ハンガリー帝国とドイツ帝国、この民族抑圧的な専制体制からロシア社会主義の旗の下に新しい理想を見出した東欧のスラブ諸国の人々、かれらの西欧回帰による市場経済の選択と社会主義の放棄は、一体、何を意味するのか、新しいテーマとして「東欧の民営化と金融・資本市場」の問題を取り組んでみようと思いました。私にとっては、学生時代からの問題意識、社会主義とは何か、とくにロシア・社会主義体制とは何か、という疑問を、その矛盾による崩壊要因と体制転換の過渡期の問題点を真正面から考えてみよう、という思いを強くしたからであります。研究のためには、何よりも、まず資料があり、研究者のいる研究機関とコン

タクトをとることが不可欠でした。

そこで、ウィーン経済大学の中・東欧経済法研究所、同じくウィーンの国際比較経済研究所、ベルリンの国際政策・安全保障研究所、例のハンブルクの世界経済研究所などにほぼ隔年ごとに出かけることとなりました。さらに、その度に、研究対象としてのチェコのプラハやスロバキアのブラチスラヴァ、ポーランドのワルシャワやクラコフにある中央銀行や取引所、ときには研究所主催のシンポジウムへの参加、などを通して、感性的に実情を経験するようこころがけてきました。一次資料の統計ぐらいは解説しようとして、スラブ語にも手を出してみました。当初、全体的な東欧の流れを把握しようとして、専門研究誌『東欧における経済と法律』などを丹念に追い続け、一度に各国の実情を時系列的に明らかにし、一般的傾向を分析しようと試みました。ところが、各国とも、移行期の状況は極めて多様であり、そのため、比較的資料の揃っていたチェコ・スロバキアから始め、その一部として纏めたのが最近の『三田商学研究』の当該テーマに関する2本の論文です。

第1論文、「国有企業の民営化プロセスについて」（『三田商学研究』第43巻6号、2001年2月）では、「所有関係の根本的変化」の観点から、大企業民営化の具体的スキームとその問題点、所有権移転を制度的に保証する、担い手としての「国有財産管理基金」の役割、同機構の特色とその評価に言及しました。第2論文、「バウチャー方式民営化の構造と問題点」（『三田商学研究』第47巻3号、2004年10月）では、「人民資本主義の強制的確立」の方法としてバウチャー配布に決定的役割を果たした「投資会社」と「投資基金」の成立とその意義、そのうえで、系列「投資基金」を媒介として企業群を統治する大銀行、これを支配する国家との融合構造、すなわち脱社会主義体制のコーポレート・ガバナンスについて、銀行中心の「ヒエラルキー構造」を分析しました。このことは、市場経済へ体制転換した経済構造は、再び「金融資本」の支配する社会体制へ移行したことを意味します。そして、この移行期の周辺国家は、EUへの統合とその中心国家への内的編成、とくにドイツとオーストリアとの関係がますます重要となっています。その場合、中心国家の「金融資本」との関係はどのようになってゆくのか。このテーマは、学位論文の研究対象から外した地域とあらためて向かうこととなりました。「新しい事実」は「古い事実」と二重写しとなって再現するかもしれない、という歴史研究との接点も期待しています。数年前、唐木先生と共同で主催した研究会で、中国の金融システムを取り扱う機会がありました。その成果は『東アジア経済研究のフロンティア』として刊行しましたが、そこでも、ドイツ金融資本の枠組みを前提とし、東欧諸国における移行期の経験を媒介にして、中国金融システムを分析したドイツ・オーストリアの研究論文を集約して展開致しました。東欧と中国、これらのテーマは、なお、「社会主義」とは何であったのか、の検討と共に評価も踏まえて今後も、追究すべき課題であると思っていたからです。

以上のように、研究の軌跡を振り返ってみると、学生時代において抽象的・理論的にアプローチして、未解明に終わった課題に、今度は局面を変えて具体的・実証的にアプローチしているように思われます。そして、20世紀の初頭の「希望の原理」に組みしてきたわれわれにとって、この「原理」の点検は当然ですが、同時に、この「原理」に代わるべき何かもまた問われていると

思います。そのためには、やはり、青春への回帰、ここに原点を置くことによって、エネルギーを補給しつつ、既に飛躍はありえないけれども、一步一步と青春時代の疑問に対応していくことによって、その答えを見出そうとする姿勢、ここに何かがあるのではないかと、思います。時代の背景もありますが、私の場合のように、なお、未だ、学部および大学院の時代の問題意識に拘束されているとすれば、如何に、学部・大学院での教育が重要であったか、そして、これまで、このような問題意識に基づく研究が保証されていたとすれば、商学部の研究環境が如何に寛大で自由であったのか、が良く分かります。しかし、先輩の築きあげた、そして今や制度的な素晴らしい条件となった教育・研究環境に対して、教師としてまた研究者として、果たして自分はその責務に十分に應えるだけの仕事を果たしてきたかのどうか、精一杯やってきた積りだけでも、この問いについては、今、答えを出すには躊躇しております。ご静聴、有難うございました。

(2006年3月1日、慶應義塾大学三田北新館ホールにおいて講演)



